二〇二四年度　**高校国語（二回）**

一、次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。（本文には一部改めたところがある）

「暇」と「退屈」という二つの語は、しばしば混同して使われる。「暇だな」とだれかが口にしたとき、その言葉は「退屈だな」と言い換えられる場合が多い。［a］、当然ながら暇と退屈は同じものではない。

暇とは、何もすることのない、する必要のない時間を指している。暇は、暇のなかにいる人のあり方とか感じ方とは無関係に存在する。つまり暇は［①］的な条件に関わっている。

それに対し、退屈とは、何かをしたいのにできないという感情や気分を指している。それは人のあり方や感じ方に関わっている。つまり退屈は［②］的な状態のことだ。

（中略）

こうして二つの語を正確に位置づけると、新しい問題が見えてくる。両者の関係の問題である。暇と退屈の関係はどうなっているのだろうか？　両者は必然的に結びつくのだろうか？　暇にオチイった人間は必ず退屈するのだろうか？　それとも、暇におちいった人間は必ずしも退屈するわけではないのか？

あるいはまた、退屈の側から暇を眺めれば次のような問いが出てくる。退屈は必ず暇と結びついているだろうか？　つまり、退屈しているとき、その人は必ず暇のなかにいるのだろうか？　それとも退屈しているからといって、必ずしも暇のなかにいるわけではないのだろうか？

上の問題を、暇の価値という観点から考察してみよう。

私たちは「ひまじん」という言葉をいい意味では使わない。それはたいてい人をバカにするために用いられる。また、「暇だ」という一言が自慢げに語られるとは思えない。要するに暇というのは評判が悪い。

ところがこれと逆のことを述べた本がある。経済学者ソースティン・ヴェブレン［1857-1929］の『有閑階級の理論』（一八九九年）である。

有閑階級（レジャー・クラス）とは、相当な財産をもっているためにあくせくと働く必要がなく、暇を人づき合いや遊びに費やしている階級のことを言う。ヴェブレンはこの階級に注目しながら、人類史の全体を描き出そうとした。

この本を読み始めると読者は最初とても驚く。いま述べた通り、そこでは、暇であることにはかつて高い価値が認められていたと書かれているからである。つまり、有閑階級は周囲から尊敬される高い地位にある階級だったと書かれているのである。

［b］有閑階級とは、いわば〝ひまじん〟の階級である。なぜこのようなことになるのだろうか？

このような疑問が出てくる原因は、暇と退屈の混同にある。既に述べたように、私たちはしばしば両者を混同する。「暇だ」という言葉はほとんどの場合、「退屈だ」という意味である。だから暇であることが悪いことに思えるのである。【A】

しかし、よく考えてみよう。暇があるとはどういうことだろうか？　言うまでもなく、暇があるとは余裕があるということだ。余裕があるとは裕福であるということだ。すなわち、あくせく働いたりしなくても生きていける、そのような経済的条件を手に入れているということだ。【B】

逆に、暇のない人たちとはどういう人たちであろうか？　暇のない人とは、自由にできる時間がない人、つまり、自らの時間の大半を労働に費やさねば生きていけない人のことだ。暇のない人とは、経済的な余裕のない人である。【C】経済的に余裕がないのだから、社会的には下層階級に属する。いわゆる「貧乏暇なし」のことである。【D】

有閑階級とは、社会の上層部に位置し、あくせく働いたりせずとも生きていける経済的条件をカクトクしている階級である。彼らは労働を免除されている。労働は下層階級が彼らの代わりに、彼らのために行うのである。それ故（ゆえ）、ヴェブレンはこのように述べたのだ。ギリシャテツガク者の時代から現代にいたるまで、労働を免除されていること、そこから解放されていることこそが価値あるすばらしいことだったのだ、と。

こう考えてもよいだろう。有閑階級とは、いわば、暇であることを許された階級である、と。

（中略）

彼ら富をもつ者は、自分たちで生産的活動を行う必要がない。やるべき仕事がない、そのことこそが彼の力の象徴である。暇であることこそが、尊敬されるべき高い地位の象徴である。したがって暇は明確なステータスシンボルとなる。

暇はステータスシンボルなのだから、有閑階級は自らの暇を見せびらかそうとする。これをヴェブレンは「顕示的閑暇（けんじてきかんか）」と呼ぶ。これは『有閑階級の理論』という本のカギとなる概念であり、有閑階級の根幹を支えるものである。

［c］有閑階級は暇を見せびらかしたい。では、どうすればよいのだろうか？　単に暇であることを人に見せつけることは難しい。そこで、彼の暇を目に見える形で分かりやすく代行してくれる人間集団が登場する。使用人集団である。彼らは暇を代行してくれる存在である。

二〇二四年度　高校国語（二回）

彼らはきれいな身なりをして、自分たちに多大な費用がかかっていることを示す。調度品のⓓイジなど、生活するには大して重要でもない仕事を熱心に行い、主人に仕える。これが「閑暇の遂行」である。「暇を遂行する」とはⓖ奇妙な感じがするが、まさしく彼らはそれを仕事にしているのである。

暇の見せびらかしが進んだ段階を、ヴェブレンは「ⓗ半平和愛好的産業段階」と呼ぶ。奴隷の使用など、略奪や暴力をむき出しにした暇の見せびらかしは避けられているからである。

［　d　］、「半平和愛好的産業段階」で実現されているのは、その名の示す通り、完全な平和ではない。平和は形式的なものに留まっている。それは当然だろう。他人の暇を「遂行」するために人が雇われるような社会が不平等に満ちていることは言うまでもないからだ。

歴史もまたこのような判断を下し、社会は徐々に変化していった。賃金労働者と現金支払制を中心にした「平和愛好的産業社会」の到来である。これは、ヴェブレンが『有閑階級の理論』を出版した頃に現れ始めていた二〇世紀の大衆社会を指していると考えられよう。

一九世紀末から二〇世紀頭にかけて、いわゆる有閑階級（その大半は利子生活者）の凋落が見られた。両世紀の境目を生きたヴェブレンの頭にもおそらく、凋落していく有閑階級の姿が思い描かれていただろうと思われる。

この段階に至ると、使用人集団が減ってくる。富の再配分が見なおされ、階級差はすこしずつ縮まっていった。その結果として、暇の見せびらかしも有効性を失う。

その代わりに現れたのがステータスシンボルとしての消費である。ある人物がどれほどの使用人を抱えているかは、その人の家にでも招かれてみなければ分からない。だが、何を着ていて、どんな家に住んでいて、どんな車に乗っているかは、一目見れば分かる。社会の規模が大きくなるにつれて、一目見てすぐに分かるようなステータスシンボルの方が重宝されるようになったわけだ。

（國分功一郎『暇と退屈の倫理学』による）

問一　二重傍線部ⓐ「オチイ（った）」・ⓑ「カクトク」・ⓒ「テツガク」・ⓓ「イジ」を漢字に改めなさい。（楷書ではっきりと大きく書くこと）

問二　空欄［　a　］～［　d　］のうち、接続詞「しかし」が入らないのはどれか。記号で答えなさい。

問三　空欄［　①　］・［　②　］に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　①経済　②政治　　イ　①必然　②偶然　　ウ　①客観　②主観　　エ　①論理　②感情

問四　傍線部③「逆のこと」とは具体的にどういうことか。本文中の言葉を用いて四十字以内で説明しなさい。

問五　次の一文が本文中より抜けている。【A】～【D】のどこに戻せばよいか。記号で答えなさい。

「ひまじん」という言葉に否定的な価値が与えられるのもそのためだ。

問六　傍線部④「暇であることを許された」とはどういうことか。最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　下層階級に労働を全て任せるなど、贅沢な生活をすることができること。
イ　裕福な経済的条件を手に入れているため、労働を強いられていないこと。
ウ　労働ができない状況下にあるので、暇であることが認められていること。
エ　暇であることは悪いことではなく、価値ある素晴らしいものであること。

問七　傍線部⑤「暇であることこそが、尊敬されるべき高い地位の象徴である」とあるが、その後「暇」に代わって有閑階級の高い地位の象徴となるものは何か。本文中より十五字で抜き出しなさい。

問八　傍線部⑥「顕示的閑暇」の言い換えにあたる言葉を本文中より八字で抜き出しなさい。

問九　傍線部⑦「奇妙な感じ」とあるが、筆者が「奇妙」と表現する理由として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　することがない状態を暇と呼ぶはずなのに、それを遂行するというのはどこか矛盾を感じるから。
イ　有閑階級は暇が力の象徴であるはずなのに、それを他の者に遂行させてしまっては意味がないから。
ウ　使用人集団は忙しくて暇がないはずなのに、重要でもない仕事を熱心に行うというのは変だから。
エ　暇というのは目には見えないはずなのに、目に見える形で代行するというのはおかしな話だから。

問十　傍線部⑧「半平和愛好的産業段階」とあるが、なぜ「半」とされているのか。本文中の言葉を用いて四十字以内で説明しなさい。

二〇二四年度　高校国語（二回）

二、次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。（本文には一部改めたところがある）

夜八時半の北の丸公園は、街を彩ⓐるクリスマスイブの華やぎとは無縁だった。

たまに通りかかるのは犬の散歩に来た人ぐらいで、カップルなどの姿は見当たらない。ここと敷地がひと続きの日本武道館ではロックバンドのコンサートがおこなわれているようだが、終演後も観客たちがこちらまで流れてくることはないだろう。

奥平さんとわたしは、芝生に面した東屋のベンチに並んで座り、体を縮こまらせていた。ニット帽、手袋、ムートンブーツと、防寒はしっかりしてきたつもりでも、湿り気を帯びた冷たい風が肌まで染み込んでくる。

「お、ついに都内でも雪の報告が出始めましたよ」

スマホでツイッターを確認していた奥平さんが言った。わたしは使い捨てカイロを頬に当てながら、画面をのぞき込む。

「いよいよですか。それにしても、みなさん熱心ですね。こんな夜に」

「僕たちだって人のこと言えませんよ」奥平さんが笑う。「チキンもケーキもないこんなところで、震えながら雪を待ってる」

予測されていたとおり、南岸低気圧が発生した。積もるかどうかは別として、関東地方の太平洋側では、今夜、ある程度の雪が見込まれている。朝の情報番組では、キャスターと気象予報士がついに東京でもホワイトクリスマスだと大げさに騒いでいた。

あれから一週間、わたしと奥平さんはメッセージのやり取りを続けた。短い文面だし、深い話をしたわけではない。他愛ない話題の中に、少しずつ互いの思いを吐き出した。気持ちが落ち着くのは思ったより早かった。奥平さんの性愛が女性に向いていれば、①こうはいかなかったかもしれない。おかしな言い方だが、わたしの中にもちゃんと女の性があるのだなと、今さらながら思った。

一緒に［　②　］の撮影をしませんかと誘ってくれたのは、奥平さんだ。この場所も、彼が指定してきた。気象庁からほど近いここ北の丸公園は、東京の気象観測点になっているそうだ。「露場」といって、温度計や雨量計などの観測機器が設置されているらしい。快適な場所やⓑ雰囲気のいい場所ではなく、純粋に科学的な理由でここを選ぶあたりが、奥平さんらしいと思った。

仕事終わりの六時半に九段下のファミレスで待ち合わせ、しばらくそこで待機していた。神奈川でみぞれが降り始めたという情報が三十分ほど前に入ったので、この東屋まで移動してきたというわけだ。

「普段はどんな風にクリスマスを過ごすんですか」わたしは訊いた。

「何もしませんよ。とくに最近はね。富田さんは？」

「わたしも、母が買ってきたケーキを食べるぐらいですかね」苦笑いを浮かべて言う。「もう、それがさびしいとすら思いません。外に出ませんし」

「僕、地元が横浜なんですよ。あっちに住んでた頃は、クリスマスに一人で港のほうまで出かけたりしましたね。ライトアップされた運河沿いを散歩したりするの、好きでした」

「へえ、きれいなんでしょうねえ」景色を想像しつつ、訊ねる。「横浜には、いつまでいたんですか」

「大学三年のときにこっちで一人暮らしを始めたんで――二十歳までかな」

奥平さんは、すっかり冷えた缶コーヒーを両手で包み、視線を遠くにやった。

「僕、気象少年だったって言ったじゃないですか」

「ええ、ベランダを気象台にして、天気図を描く少年」

③「一時期、気象から離れていた期間があるんですよ。高校に入ってから、二十歳のときまで」

「何かあったんですか？　あ、運動部に入ったとか？」

「いえ。高校で、彼と出会ったんです」

「ああ……」

「経験ありません？」奥平さんは屈託のない声で訊いてくる。「色気づいて好きな子ができたりなんかすると、それまで夢中だったことが、どうでもよくなる。それが急に幼稚に思えたりして」

「わかります」わたしも微笑んだ。

「まさにそれですよ。でも」奥平さんはわずかに目を伏せた。「僕は、すごく苦しみました。自分の……欲望に。どこにぶつけたらいいか、本当にわからなかった」

「――はい」［　A　］。

それを気にしたのか、奥平さんはことさら明るく続ける。

「まさに悶々とするってやつですよ。もう気象どころじゃありません」

二〇二四年度　高校国語（二回）

「その彼とは、親しかったんですか」
「ええ。彼と僕とあと二人、四人でいつもつるんでて。でも、高二の夏にね、彼に彼女ができたんです。近くの女子高に通う、本当にきれいな子でね。まさに、誰もがうらやむ美男美女のカップル」
「――そうですか」
「ちょうど同じ頃に、生物の授業で教師がこんな話をしたんです。『昆虫が花粉を媒介する被子植物では、他のどの器官よりも、花においてその遺伝的多様性が顕著になっている』」
「えっと……」
「ちょっと言葉が硬すぎますよね。要するに、植物は、花粉を運んでくれる昆虫に対して自分を目立たせるために、色とりどりの美しい花を進化させてきたということです」
「ああ、なるほど」
「それを聞いて、十七歳の僕は考えました。結局のところ、美しさなんてものは、まやかしじゃないかって。美しい花も、美しい鳥も、美しい人も、生殖のためにそうなっているにすぎない。よく言うじゃないですか。美人というのは、遺伝的に生存率の高い平均的な顔のことだって。つまり僕たちは、自分の遺伝子を効率よく残すのに有利な対象を、美しいと感じているにすぎない。美という感覚は、錯覚のようなもの。ただの方便――」
　そこで奥平さんは首をのばし、空を見上げた。雪もみぞれもまだ落ちてきていないことを確かめてから、続ける。
「それから僕は、美しいものを美しいと思わないことにしました。むしろ、④エゴが姿を変えた薄汚いものだって。もし僕がⓒ絶世の美男子だったとしても、それは僕が子孫を残すことに何の意味もなさないでしょ。つまり僕という人間は、生殖の原理の*埒外にいる。だから僕には、美しいものを美しいと認めない権利があるんだ――ってね。高二にもなって、中二病丸出し。ほんと、バカですよね」
「バカだなんて思いませんよ」それどころか、⑤十七歳の彼を抱きしめてやりたい衝動に駆られたほどだ。
「そんな風に自分をなぐさめたところで、苦しさから逃れられるわけじゃありません。僕も彼も東京の大学に進んだので、友だち付き合いは続きました。で、忘れもしません、一九九九年の大晦日。日本中が盛り上がってたじゃないですか」
「そうでしたね。懐かしい」
「高校のときつるんでた四人で横浜港のカウントダウンイベントに行こうってことになりましてね。待ち合わせ場所に行ったら、彼が新しい彼女を連れてきたんですよ。バイト先で知り合ったとかいう一つ年上の、これまた目が覚めるような美人。肩寄せあって歩く二人を後ろから眺めながら、決めたんです。彼と会うのはこれで最後にしようって」奥平さんはこちらに顔を向け、冗談めかして付け足す。「なんたって、いい区切りだし」
「*ミレニアムだし」とわたしも返した。
「人ごみに紛れて、そっとその場を離れました。はぐれてしまったことにしてね。その日以降、彼とは連絡を絶ちました。悪いと思いましたが、一方的に」
「もしかして、東京で一人暮らしを始めたのも――」
「まあ、⑥いろいろリセットする意味でね。彼が今どこで何をしているのかはわかりませんが、結婚したということだけは人づてに聞きました」
「――そういうことでしたか」
「で、ちょっと話は戻りますが」
　奥平さんは立ち上がり、一歩屋根の外に出た。
「そのミレニアム前夜、みんなの前から黙って消えたあとのことです。僕は家に帰る気分にもなれなくて、一人で横浜の街をさまよってました。でも、赤レンガ倉庫も山下公園も、当たり前ですが人がいっぱいでね。山手のほうまで歩いていって、小さな児童公園に入ったんです。ゾウの形をした置き物というかベンチがあって、そこにぼんやり座ってました。たぶん泣いてはなかったと思うんですが」
「泣いたっていいじゃないですか」
　奥平さんは「今なら泣けたと思います」と目尻にしわを寄せ、続ける。
「で、しばらくするとね、雪がちらつき始めたんです。あとで調べたところによると、その日の気圧配置は強い冬型だったんですが、北西の風と、北東から回り込む風とが東京湾あたりでぶつかって、収束帯に雪雲が――って、そんなことどうでもいいか」
　わたしは［　　B　　］。
「その日、僕は今日みたいに紺色のコートを着ていて、袖にどんどん雪結晶がくっついていく。きれいな、ほんとにきれいな樹枝状六花がたくさんあってね。見事な形の結晶が溶けていくのを見ているうちに、気づいたんです。⑦気づいたというか、思い出した」

二〇二四年度　高校国語（二回）

「思い出した？」
「知ってたってことをです。雪の結晶は、雲の中で、完全に物理プロセスのみによって生まれます。何の意図も意味もなく、ただの偶然によって、あの完璧（かんぺき）な立体や幾何学模様が形成されている。性とも欲望とも遺伝子とも、関係ありません。なのに雪結晶は、誰が見たって、掛け値なしに、ただ美しい。そんなこと、僕は子どものときから知ってたはずなんです」
［　C　］。唾（つば）を飲みこみ、やっとのことで「――本当に」とだけ発した。
そうだ、確かに。この世界で、美を誇っているのは、花や鳥や人だけではない。雪の結晶、雲や空が垣間見（かいまみ）せる、無機質の美。見つけられることを望んですらいない、ただそこにある美。ⅾ潔く、はかない美。わたしだって、それはよく知っている。知っているのに――。
「それを思い出したおかげで、僕は気象少年に戻れたんです。いや、もう少年じゃないですね。立派な気象オタクだ」
目を細める奥平さんと顔を見合わせていると、［　D　］。
この人は、欲望をたやすくコントロールできる人などではなかった。誰よりも欲望に苦しんできた人だった。美しいものを憎みながら、それでもまた、美しいものを見つけられる人だった。やっぱり素敵な人だと、あらためて思う。
奥平さんが「あ」と声を上げ、さらに二、三歩進み出た。空を見上げ、両手を広げる。
「降ってきた」
「ほんとですか」わたしも慌てて立ち上がり、芝生に出る。
確かに白いものがはらはらと舞い落ちてきている。みぞれではなく、雪らしい雪だ。空を仰ぐと、頬の上で冷たいものが溶けた。

（伊与原新「星六花」による）

（注）＊　埒外　＝　一定の範囲の外。
＊　ミレニアム　＝　西暦で言う一〇〇〇年単位。俗に西暦二〇〇〇年のことを意味する。一九九九年が二〇〇〇年に切り替わる際、様々なイベントが催された。

問一　二重傍線部ⅾ「彩（る）」・ⅾ「雰囲気」・ⅾ「絶世」・ⅾ「潔（く）」を平仮名に改めなさい。
問二　空欄［　A　］～［　D　］に入る言葉として最も適切なものを次より選び、それぞれ記号で答えなさい。
ア　今度は鼻がつんとしてきた　　イ　小さく言うしかできなかった　　ウ　胸がつまって、言葉が出てこなかった　　エ　笑ってうなずき、先をうながした
問三　傍線部①「こうはいかなかったかもしれない」とはどういうことか。最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。
ア　猛烈アタックを続けたかもしれない。　　イ　拒まれたことを恨んだかもしれない。　　ウ　激しい嫉妬にかられたかもしれない。　　エ　あきらめきれなかったかもしれない。
問四　空欄［　②　］に入る言葉を本文中より三字で抜き出しなさい。
問五　傍線部③「一時期、気象から離れていた期間がある」のはなぜか。その理由として適切でないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。
ア　好きな子ができたことで夢中だった気象が急に幼稚に思えてきたから。
イ　好きな子への思いを持て余し悶々として気象どころではなかったから。
ウ　好きな子を含んだ仲のよい四人でいつもつるんでいて忙しかったから。
エ　偶然が織りなす気象の掛け値なしの美しさをすっかり忘れていたから。
問六　傍線部④「エゴが姿を変えた薄汚いもの」とあるが、ここでいう「エゴ」の具体的な内容について、本文中の言葉を用いて二十字以内で説明しなさい。
問七　傍線部⑤「十七歳の彼を抱きしめてやりたい衝動に駆られた」のはなぜか。その理由として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。
ア　十七歳の彼は心の美しさという点では相手の彼女に全く引けを取らないことを認めてあげたくなったから。
イ　十七歳の彼が美しさを忌み嫌うことで相手に彼女がいる苦しさから逃れようとしたことが切なかったから。
ウ　十七歳の時からすでに彼は素敵な人だったということが分かり彼を思う気持ちがより一層強くなったから。
エ　十七歳の彼に無理をせずもっと自分の気持ちに対して素直に生きるべきだと勇気づけてみたくなったから。
問八　傍線部⑥「いろいろリセットする意味でね」とあるが、「いろいろ」の内容として適切でないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。
ア　男性が性愛の対象であったこと。　　イ　彼への思いで苦しんできたこと。　　ウ　美しいものを否定してきたこと。　　エ　気象への興味を失っていたこと。
問九　傍線部⑦「気づいたというか、思い出した」とあるが、何を「思い出した」と言うのか。本文中の言葉を用いて四十字以内で説明しなさい。

二〇二四年度　**高校国語（二回）**

三、次の古文を読んで、後の各問いに答えなさい。

那須の黒羽（くろばね）といふ所に、知人（しるひと）あれば、是（これ）より野越（のごえ）にかかりて、*1直道（すぐみち）を行かむとす。はるかに一村を見かけて行くに、雨降り、日暮るる。農夫の家に一夜をかりて、明（あく）ればまた野中を行く。そこに野飼（のがひ）の馬あり。草刈（くさかる）をのこに①なげきよれば、野夫（やふ）といへどもさすがに情しらぬにはあらず。「*2いかがすべきや。されどもこの野は東西縦横にわかれて、*3うひうひしき旅人の道ⓐふみたがへむ、*4あやしう侍（はべ）れば、この馬のとどまる所にて馬を返し給へ」と、かし侍りぬ。ⓑちひさきものふたり、馬の跡したひてはしる。ひとりは小娘にて、名を「かさね」といふ。聞きなれぬ名の*5やさしかりければ、

②かさねとは八重撫子（やへなでしこ）の名なるべし　曾良（そら）

やがて人里に至れば、③あたひを鞍（くら）つぼに結びつけて、馬を返しぬ。

（注）＊1 直道を行かむとす ＝ まっすぐに近道を行こうとした
＊2 いかがすべきや ＝ どうしたらよいだろうか
＊3 うひうひしき旅人 ＝ 土地に不慣れな旅人
＊4 あやしう侍れば ＝ 心配ですから
＊5 やさしかり ＝ 上品・優雅

問一　二重傍線部ⓐ「ふみたがへむ」・ⓑ「ちひさきものふたり」を全て平仮名・現代仮名遣いに改めなさい。

問二　傍線部①「なげきよれば」とあるが、どういうことを嘆いたと考えられるか。最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　天気が変わりやすい土地で過ごす難しさ。
イ　全く知らない野道を旅することの苦しさ。
ウ　知り合いなどだれもいない旅のさびしさ。
エ　馬も同行させられないほどの旅の貧しさ。

問三　傍線部②「かさねとは八重撫子の名なるべし」の俳句に込められた心情として、最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　あまり聞きなれないが、たいへん風流な名前が子どもにつけられていたという感動。
イ　馬を心配して追いかけてくる子どものやさしさが手にとるようにわかるという共感。
ウ　見知らぬ土地での心細さの中、無邪気な子どもと触れあうことができたという喜び。
エ　かさねというあまり聞きたことのない名前を子どもにつける、地方の文化への驚き。

問四　傍線部③「あたひを鞍つぼに結びつけて、馬を返しぬ」の行為に込められた心情を漢字二字で答えなさい。

問五　本文は『奥の細道』の一節であるが、この作品が成立したのはいつの時代とされているか。その時代を漢字二字で答えなさい。